台湾の原住民を知る

狩野 修二

台湾の原住民（台湾では、先住民のことを「原住民」と正式に呼称しており、本稿でもこれを使用する）は、台湾の四大エスニック・グループのひとつである（その他の三つは「外省人」「閩南人」「客家人」でいずれも中国大陸から渡ってきた人々である）。原住民はさらに多くのグループに分類されるが、現在政府により公認されているのは一六民族である。彼らの人口は二〇一五年末現在で約五四万六〇〇〇人であり、台湾全人口の約二・三%に過ぎないが、台湾社会を語る際に欠かせない集団である。ここでは、最近刊行された図書のなかから台湾原住民を扱った資料を紹介する。

王甫昌著、松葉隼・洪郁如訳『族群：現代台湾のエスニック・イマジネーション』（東方書店、二〇一四年）では、現代の台湾社会において、前述の四大エスニック・グループという集団分類が実は比較的最近の発明であり、「原住民」のなかにもそれぞれの言語、文化、風俗習慣を持つ複数の民族がいることを指摘している。そのうえで、これら集団間の関係性がどのようなものなのかを分析している。また、もともとは台湾の「唯一の主人」であった原住民がマイノリティへと至った歴史的経緯についても記されている。

台湾の歴史は、オランダによる統治が始まった一二六〇年代からの約四〇〇年間について言及されることが多いが、**周婉窈著、石川豪・中西美貴・中村平訳『図説台湾の歴史増補版』（平凡社、二〇一三年）**は、統治者の観点ではなく、台湾島をその観点とし、さらに先住民を記述の起点として執筆している。これにより三万年～五万年前の先史時代から、民主化が進んだ一九九〇年代までの台湾の歴史を支配者以外の観点から知ることができる。

特定の原住民グループに着目した研究資料としては、**山路勝彦著『台湾タイヤル族の一〇〇年：漂流する伝統、蛇行する近代、脱植民地化への道のり』（風響社、二〇一一年）**がある。タイヤル族は主に台湾の中北部の山地に居住しており、その人口は、二〇一五年末現在で約八万七〇〇〇人、原住民のなかでは三番目に人口が多い。この本では人類学的視点から過去一〇〇年以上に渡るタイヤル族の生活文化について記述しており、日本統治以前、日本統治中、そして日本統治後の彼らの伝統的生活とその変容、新たな文化創造について知ることができる。

石垣直著『現代台湾を生きる原住民：ブヌンの土地と権利回復運動の人類学』（風響社、二〇一一年）では、主に台湾中央の山脈地帯に居住しているブヌン族を対象とし、一九八〇年代半ば以降進められた原住民の権利回復運動のうち、特に土地返還に関して人類学的に記述・分析した資料である。

台湾では現在一六の民族が政府により認定されていると先に述べたが、このなかには含まれない平埔族と呼ばれるグループが存在する。彼らは明代以降、中国大陸より流入・移住して来た漢人との通婚や交流により次第に漢族化していき、その多くが原住民として認定されていない。**天理大学附属天理参考館編集『台湾平埔族、生活文化の記憶』（天理大学出版部、二〇一二年）**は、天理大学が所蔵している平埔族に関する古文書を紹介した資料で、平埔族のなかでも主にパゼッヘ族と呼ばれる人々の文化と生活を垣間みることができる。

原住民政策や原住民の選挙行動については、**沼崎一郎・佐藤幸人編『交錯する台湾社会』（日本貿易振興機構アジア経済研究所、二〇一二年）**の第三章に詳しい。歴史的に原住民が政策のなかでどのような扱いを受けてきたか、また選挙時の彼らの投票行動、支持政党などについて分析している。さらに原住民へのインタビュー調査も行っており、そこから彼らのなかにも社会・政治に対してさまざまな考えがあることをうかがい知ることができる。

複数のエスニック・グループがいること、また度重なる統治者の変化などの歴史的理由から台湾で使われている言語も一様ではない。**菅野敦志著『台湾の言語と文字：「国語」・「方言」・「文字改革」』（勁草書房、二〇一二年）**では、一九四五年以降の言語・文字政策についてまとめられている。原住民の言語については、一元的な国民統合政策から、多様性を尊重する「多言文化主義」への移行のなかで見直され、郷土教育の一環として学校教育に組み込まれていく過程が記されている。

林怡蘟著『台湾のエスニシティとメディア：統合の受容と拒絶のポリティクス』（立教大学出版会、有斐閣（発売）、二〇一四年）では、四大エスニック・グループのなかでその数・社会的地位双方においてマイノリティである原住民と客家に特に焦点を当て、「原住民テレビ」や「客家テレビ」といったエスニック・メディアが台湾のメディア政策や制度のなかでどのように排除され、そしてそれに抵抗してきたのかについて調査分析を行っている。

（かのう　しゅうじ／アジア経済研究所　図書館）